

共鳴法教本

1.1.1 【2014年9月17日版】

朱鯨亭 奈良市西笹鉾町 40
phone / 080-3811-3051
website / <http://shugeitei.com>
email / shugeitei@gmail.com

共鳴法を使う上でもっとも注意をする必要があるのは、次の3つの「すぎず」です。

強すぎず 強い力をかけず、そっと撫でよう。

やりすぎず 効果があるからと、何度も撫でたりさすったりしないように。

早すぎず 一度刺激を与えた後は、次に刺激を入れるまでしばらく待とう。

【目次】

序論 超感覚的な潜象構造について 2

第1章 足・脚 5

第2章 骨盤 16

第3章 手と腕 23

第4章 肩 29

第5章 背中・背骨 33

第6章 顔面・頭部 38

<序論> ホログラムと形態形成場、超感覚的な潜象構造について

代替医療の世界でよく「気」という概念が使われる。それに対して従来さまざまな説明が行われていて、「光線」と捉えるものや「人体ラジウム」説まである。ここでそのような説にさらに一つを付け加えようとは考えないが、共鳴という現象を目のあたりにして、これは何なのかと考える人はいまい。とすると共鳴という現象が見られるわけについて、少し考えておきたい。

現代イギリスの生物学者ルパート・シェルドレイクという人が「**形態形成場**」という仮説を提唱している。一例を上げると、新しいジグソー・パズルを誰かが解くと、次に挑戦する人はやりやすくなっているというのがある。この実験は実際にヨーロッパで行われて、この考えが正しいことが何度も証明された。この仮説を巡っては科学者の中に反論も多く、まだ一般に広く認められているとはいえないが、このテキストで説明する操法の原理は、この仮説を認めれば簡単に説明がつきそうに思える。

誰か(この場合は著者)が一つの操法を始める。それまで誰もそんなことをしたことはないし、考えたこともない操法である。ところがこの操法を二度、三度とやるうちに、他の人がやってもうまく出来るようになって行く。同じ動作の形態を反復することで、その動作の形態が維持される(形態が形成された)ということになる。

もうひとつ取り上げたいのは「**ホログラム**」という考え方である。これはこれまでも取り上げられて来たもので、全身と足の裏が対応するとか、全身と耳とが対応するとかの考え方が「足ツボ」・「耳ツボ」の技法として開発されている。古代中国から伝えられた鍼灸の経絡も、この考え方につながるものだろう。一口にいうと、「部分が全体を反映する」ということになる。全身を反映する「区」が足や耳に存在して、「区」に刺激を与えることで全身を変化させるといふ技法だと言える。人によって、これを「**写し身**」と呼んでいる人もいる。私はこの反映関係を「**共鳴**」と呼んでいる。韓国の「高麗手指鍼」では「**相応**」と呼ばれている。

「足ツボ」と「耳ツボ」の両方の技法を使うとすれば、ホログラムを二重に使っていることになる。このような場合を私は「**二重共鳴**」と呼びたい。以下で使うのは、全身と手の対応関係なので、「手ツボ」と呼ぶこともできる。このような考え方を単一で使うなら、それは「**単一共鳴**」ということになるが、以下では、全身と手の対応関係だけでなく、頭部と手との対応も使うので、「**二重共鳴**」ということになるが、これは頭部を手との共鳴だけで扱おうとすると、中指の先だけが頭部ということになり、細かくなり過ぎて操作が難しくなるからだ。

そうすると全身と手との対応関係は、現実に根拠のあるものか、それとも操者が設定するものなのか、という疑問が出るかもしれない。例えば中指の中手骨を見ると、背骨に何かの異常がある時、必ず対応する場所に「**硬いポイント**」とか「**しこり**」とかを感じ取ることができる。これは現実に対応関係が存在していることを表している。ところが同時に、二重の共鳴関係を操者が設定することができるのだから、操者の意識とも関係していることを表している。どちらでもあるということ、それは矛盾していると感じる人がいるかもしれない。つまり操者が

[基本用語]

【操法】 身体の一部を刺激して、身体の状態を変えること、またはその操作をいう。「整体」、「カイロプラクティック」、「オステオパシー」、その他いろいろな方法があるが、「整体」という名称はもともと一部の流派で使われたので、ここでは広い意味で「操法」と呼ぶ。

【共鳴】 身体のある部分(例えばかかと)と手の部分(小指の末節骨の掌側)とが対応関係にある。その対応関係を使って身体に**刺激**を入れ、身体を変化させる操作をいう。またそれによる操作法を「共鳴法」と呼ぶ。以下のように、さまざまな刺激法がある。

【共鳴点】 手のどこか一部に操法すると、対応する身体に変化が現れる。操法を施す手の一部の点を「**共鳴点**」と呼び、それに対応する身体の点を「**対応点**」とよぶ。**左右両手に操法する**のがよい。

【影響】 一つの操法をすると、身体全体が反応してバランスを取ろうとするから、かならず対応点だけでなく、他にも影響が及び、見えない変化が起きていると考えなければならない。したがって一つの操法をした後は、しばらく時間をおいた方がよい。

【骨格と筋肉】 ふつうには筋肉の緊張状態が変化して骨格が動くと考えられている。しかし共鳴法を使うと、まず骨格が変化して、それに伴って筋肉が動くように感じられる。骨格を動かす方がずっと簡単で無駄がない。しかも的確である。

【擦る】(にする) 操法の多くは、手の甲や手の平を擦ることによる。ただし強く擦っては効果がない。できるだけ弱く、そっと擦ること。指先方向に擦ると「**筋肉が緩む**」。手前方向に擦ると「**関節が締まる**」。筋肉を緩めたい時は、指先方向に、関節を引き締めたい時は、手前方向に擦る。

【短擦・中擦・長擦】 爪先または指先でそっと擦る。**短擦**(たんさつ)は数ミリ程度をつめ先で擦る。1点に刺激を入れたい場合。**中擦**(ちゅうさつ)は1センチほど指先で擦る。長い範囲に刺激を入れたい場合。**長擦**(ちようさつ)は、場合によって違うが、肋骨全体など広い範囲に刺激を入れる場合。指先で2～数センチ擦る。

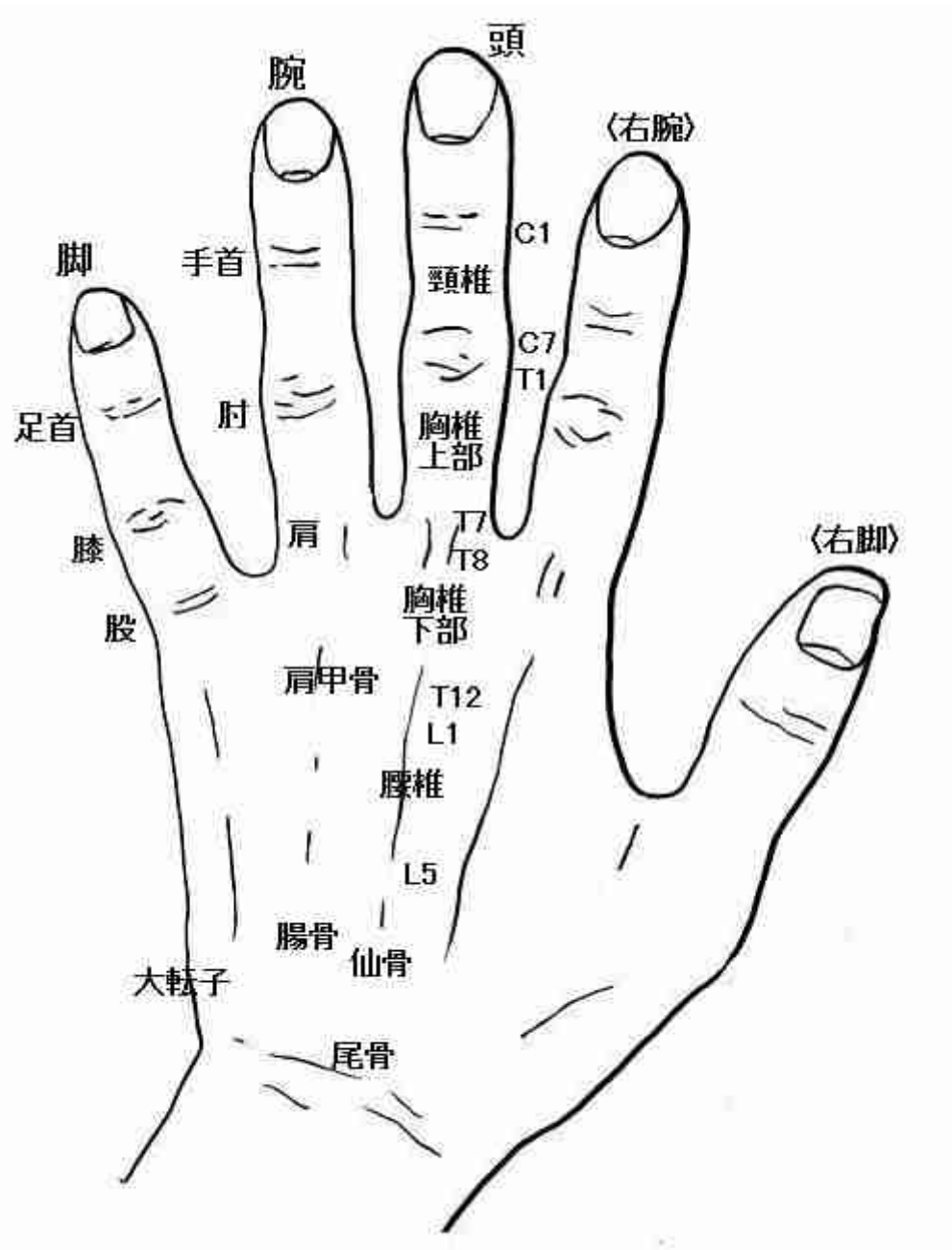
【押える】 共鳴点を押えるのは、対応点を押えるのと同等の効果がある。つまり、どこか凸になっている対応点を凹に変えようとするれば、共鳴点を押えるとよい。

【撫でる】 長く擦るのと違って、同じ小さな範囲をくるくると撫でること。回す方向は任意。特に弱く撫でることが必要で、強いと効果が違ってしまう。押えるのと逆で、凹になっている場所を凸に変えたい時に使う。

【強圧】 ある一点をつめ先などで、強く押す特殊な方法。関節以外の場所に原因不明の痛みがある時などに使う。

【圧痛】 身体のどこか一部にある程度の強い力をかけた時に感じる痛み。一般に**圧痛を感じる側に骨が変位**している。変化させたい方向を探るのに圧痛のある場所を調べる。

【反復】 一度の操法で効果が十分に出ない時は、2度～3度おなじことをすればよい。しかし、効かないからといって、多数回の操法を反復すると、予想外の副効果が出て、却ってよくないことがあるので、**決して多数回の反復を行ってはならない**。せいぜい3回程度まで。



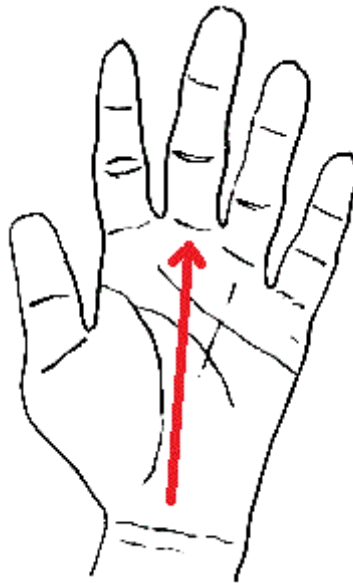
左手甲側共鳴区

手と全身との間に図の文字で書いたような対応関係がある。例えば「足首」と書かれた小指の第一関節に何かの操法(身体に加える操作)をすると、ずっと離れた「足首」に何か効果が出る。

図にない個所についても、図の考えを拡張すれば、対応点を見つけることができる。例えば「耳」であれば、中指の爪の付け根の側面あたりに対応個所がある。こうした個所に適当な刺激を入れると、対応個所に効果が現れる。身体の右側は右手を使う(図とは左右対称)。

中指と其中手骨の上には、背骨に対応する点が並んでいるので、背骨の調整も、同じ考えで行なうことができる。

対応関係は、中節骨が頸椎、基節骨が胸椎上部、中手骨遠位が胸椎下部、中手骨近位が腰椎で、L2とかT10とかの詳しい点は、その間を等分すればよい。

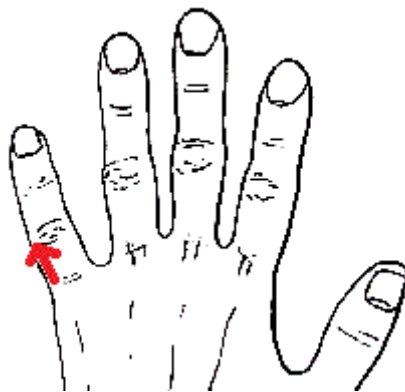


大腰筋を緩める

【意味】 腹の深部にある大腰筋は代表的な「インナー・マッスル」として鍛えることが奨励されている。腹筋運動を繰り返して大腰筋などが硬くなると、却ってからだの動きが悪くなる。

【確認】 大腰筋そのものに直接に触れることはできないが、ここが緩むと、大腿の内転筋群が緩んで大腿内側の圧痛が消える。

【影響】 膝の内側に痛みが出ている場合に効果がある。股関節の動きによい影響がある。



腸脛靭帯を緩める

【意味】 体重が中心軸から逸れて外側に寄っている人が多いため、大腿の左右両側にある腸脛靭帯が硬くなっていることが多い。

【操法】 図の → に沿って、軽く撫でる。

【確認】 効果が見られるまでしばらく時間がかかるので、数分おいてから確認する。

【影響】 ここが緩むと、伴って側頭骨が前方に上がる。耳の後ろの乳様突起の出っ張りが小さくなっているかどうかを確認するとよい。